

審査の結果の要旨

氏名 福島 智

本論文は、18歳までに視覚と聴覚の双方を失って「盲ろう者」(deafblind person)となった筆者(福島)が、自己自身を対象にして行う事例研究である。

本論文の研究目的は、次の二つである。第一は、福島智が9歳で失明し18歳で失聴して盲ろう者となり、「視覚・聴覚の喪失と指点字によるコミュニケーションの再構築」を経験した過程を多角的・重層的に記述することであり、第二は、その記述をもとにこの過程を分析・考察することで、盲ろう者となった福島智の「生のありよう」の本質的な意味を探ることである。

換言すれば、本論文において目指すものは、こうした体験の過程をできるかぎり緻密に記述することを通して、一方で、一盲ろう者の特殊な体験を鮮明に浮かび上がらせるとともに、他方で、その体験の分析・考察を通して、より普遍的なテーマへのアプローチを試みることである。ここでいう普遍的なテーマとは、1)人間にとってのコミュニケーションの意味、2)苦悩と障害の意味、3)人が他者により支えられ、同時に他者を支える関係にあるということ、4)孤独と他者とのつながり、等のテーマを指し、これらについての一定の示唆的知見を得ることが研究の目的である。

自己の体験を対象とした学術的研究の方法論としては、「自己エスノグラフィー」(auto-ethnography)とよばれる手法が近年注目されてきているものの、この方法論はいまだ十分確立されておらず、加えて盲ろう者自身がこの方法で行った先行研究は、世界的に前例がない。そのため、筆者は本論文において、一定程度、研究の方法論自体を独自に考案した。具体的には、筆者が自己について記述する際、まず自己を時間的に不連続な存在として三つに「分節化」することである。そして、これらが三者でありながら同時に同一存在でもあるという、いわば「三位一体的自己把握」を試みた。また、それとともに、統一体としての筆者を「内部」(主観)と「外部」(客観)の両面から、いわば認識上「空間的」にも分節化して把握することを目指した。この後者の認識上の「空間的分節化」を担保する方法として、自己自身がインタビューの客体にもなる、という「他者媒介型自己回帰インタビュー」という手法を案出した。

本論文の構成を以下、簡潔に述べる。本論文は三部・12章で構成される。第一部第1章では、この論文全体で取り上げる「盲ろう」という概念について、予備的な考察を行った。第2章では、本論文全体の目的と方法を述べた。第二部は、第3章から第10章までで構成され、さらにIとIIに分かれる。Iは筆者の出生から盲ろうの状態になる直前までの時期を記述の対象とし、第3章と第4章が含まれる。IIは筆者が盲ろうの状態となる前後からコミュニケーションを再構築し、「再生」していくまでの時期を記述の対象とし、第5章から第10章が含まれる。第三部では第二部の記述をもとに分析と考

察を行った。

前述の方法にしたがって、筆者の事例を分析した結果、二つの重要なテーマを抽出した。第一は「文脈的コミュニケーション」であり、第二に、「根元的な孤独」と「他者の存在」をめぐる問題である。

第一のテーマについて筆者は、自らの視覚・聴覚の喪失を、「感覚的情報の文脈」の喪失という観点で考察した。検討を通して、外部世界の情報を獲得するうえでの主要なチャンネルである視覚と聴覚を筆者が失った過程とは、すなわち、コミュニケーションにおける非言語的情報の大半を失った過程でもあったことが明らかとなった。このことを筆者は、「感覚的情報の文脈」を喪失した過程として把握した。

こうした検討を踏まえ、筆者が盲ろう者になった直後に陥った深い孤独状態の本質とは、「感覚的情報の文脈」の喪失であり、さらに、それによってもたらされたコミュニケーションにおける「文脈の不在状況」であったと分析した。そして、そうした苦境を救ったものが、単に指点字という方法で新たに提供された言語的コミュニケーションではなく、「文脈のある言語的情報」こそが筆者の苦境を救ったのだと結論付けた。

第二のテーマについては、筆者にとって自らが盲ろう者となった体験の意味、そして現在まで連続するその盲ろう者としての生のありようについて考察した。そして、最終的に次のような思索に到達した。

人はみな、それぞれの認識の「宇宙」に生きており、それは部分的には重なり合っていたとしても、完全に一致することはない。時にはまったく交わらないこともある。このように、ばらばらに配置された存在であるからこそ、また、その孤独が深いからこそ、人は他者の存在を「憧れる」のではないか。筆者の盲ろう者としての生の本質は、この根元的な孤独と、それと同じくらい強い他者の存在への憧れの共存なのではないか、という認識である。

このように、本論文は、人生途上で視覚・聴覚を喪失した盲ろう者である筆者が自己自身を対象に行った事例研究であり、方法の斬新さ、内容の独自性、分析の独創性において高い水準にあり、世界的にも前例のない研究である。

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。